

This Page Is Inserted by IFW Operations  
and is not a part of the Official Record

## **BEST AVAILABLE IMAGES**

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

**IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.**

**As rescanning documents *will not* correct images,  
please do not report the images to the  
Image Problem Mailbox.**

## PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 05-224330

(43)Date of publication of application : 03.09.1993

(51)Int.Cl.

**G03C 1/06**

G03C 1/22

(21)Application number : 04-023857

(71)Applicant : **KONICA CORP**

(22)Date of filing : 10.02.1992

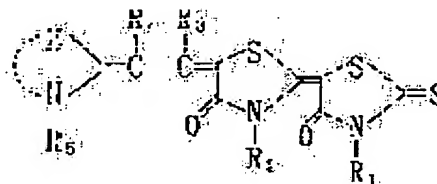
(72)Inventor : SANPEI TAKESHI

## (54) SILVER HALIDE PHOTOGRAPHIC SENSITIVE MATERIAL

**(57)Abstract:**

**PURPOSE:** To obtain the photosensitive material high in sensitivity in a red wavelength region and small in residual color stains after development processing and occurrence of black spots even during storage at high temperature by spectrally sensitizing the photosensitive material by a specified spectral sensitizing dye and incorporating a hydrazine derivative in a silver halide emulsion layer and/or its adjacent layer.

**CONSTITUTION:** The photosensitive material is spectrally sensitized by at least one kind of the spectral sensitizing dye selected from formula I to have the photosensitive wavelength region substantially in 600–700nm, and the silver halide emulsion layer and/or its adjacent layer contains the hydrazine derivative. In formula I, Z is an atomic group necessary to form a thiazole, benzo- or naphtho-thiazole, selenazole, benzo- or naphtho-selenazole; and each of R1–R5 is, independently, H, optionally substituted alkyl, or aryl, and at least 2 of them are each an organic group having a water-soluble group.



## LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 23.05.1997

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number] 2926453

[Date of registration] 14.05.1999

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's

decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2003 Japan Patent Office

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 特 許 公 報 (B 2)

(11)特許番号

第2926453号

(45)発行日 平成11年(1999) 7月28日

(24)登録日 平成11年(1999) 5月14日

(51)Int.Cl.<sup>8</sup>G 0 3 C 1/06  
1/22

識別記号

5 0 1

F I

G 0 3 C 1/06  
1/22

5 0 1

請求項の数3 (全 35 頁)

(21)出願番号 特願平4-23857

(22)出願日 平成4年(1992) 2月10日

(65)公開番号 特開平5-224330

(43)公開日 平成5年(1993) 9月3日

審査請求日 平成9年(1997) 5月23日

(73)特許権者 000001270

コニカ株式会社

東京都新宿区西新宿1丁目26番2号

(72)発明者 三瓶 武司

東京都日野市さくら町1番地コニカ株式  
会社内

審査官 秋月 美紀子

(56)参考文献 特開 平3-171135 (J P, A)

特開 昭49-33785 (J P, A)

特開 平2-38 (J P, A)

特開 平2-293839 (J P, A)

(58)調査した分野(Int.Cl.<sup>8</sup>, D B名)

G03C 1/06 501

G03C 1/22

(54)【発明の名称】 ハロゲン化銀写真感光材料

1

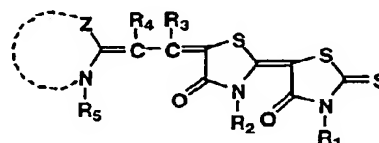
(57)【特許請求の範囲】

【請求項1】 支持体上に少なくとも1層のハロゲン化銀乳剤層を有するハロゲン化銀写真感光材料において、下記一般式〔I〕から選ばれる少なくとも1種の分光増感色素により分光増感され、かつ該ハロゲン化銀乳剤層及び/又はその隣接層中に下記一般式〔H〕で表されるヒドラジン誘導体を含有することを特徴とするハロゲン化銀写真感光材料。

【化1】

2

一般式〔I〕



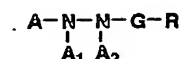
10 〔式中、Zはチアゾール、ベンゾチアゾール、ナフトチアゾール、セレナゾール、ベンゾセレナゾール、ナフトセレナゾール環を完成するに必要な原子群を表す。

R<sub>1</sub>、R<sub>2</sub>、R<sub>3</sub>、R<sub>4</sub>及びR<sub>5</sub>はそれぞれ同じか又は異なってもよく水素原子、アルキル基、置換アルキル基又はアリール基を表す。ただし、R<sub>1</sub>、R<sub>2</sub>、R<sub>3</sub>、R<sub>4</sub>及びR

5のうち少なくとも2つは、水溶性基を担持した有機基を表す。]

【化A】

一般式【H】



【式中、Aは置換アリール基、又は硫黄原子又は酸素原子を少なくとも一つ含む複素環基を表し、Gは—(C(O))<sub>n</sub>—基、スルホニル基、スルホキシ基、—PO(R)—基、又はイミノメチレン基を表し、nは1又は2の整数を表し、A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>は共に水素原子或いは一方が水素原子で他方が置換もしくは無置換のアルキルスルホニル基、又は置換もしくは無置換のアシル基を表し、Rは水素原子、置換もしくは無置換のアルキル基、アリール基、アルコキシ基、アリールオキシ基、アミノ基、カルバモイル基、オキシカルボニル基又は—O—R<sub>4</sub>基を表し、R<sub>4</sub>は置換もしくは無置換のアルキル基又は飽和複素環基を表す。]

【請求項2】 前記水溶性基のうちの少なくとも1つが、水溶液中でイオン化できる酸及び塩基であって、かつpKaが4～11の水溶性基を有した増感色素であることを特徴とする請求項1記載のハロゲン化銀写真感光材料。

【請求項3】 前記水溶性基のうちの少なくとも1つがpKaが4以下の水溶性基を有した増感色素であることを特徴とする請求項2記載のハロゲン化銀写真感光材料。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は支持体上にハロゲン化銀感光層を有する写真感光材料に関し、更に詳しくは高コントラストが得られる写真感光材料に関する。

【0002】

【発明の背景】 写真製版工程には連続調の原稿を網点画像に変換する工程が含まれる。この工程には、超硬調の画像再現をなす写真技術として、伝染現象による技術が用いられてきた。

【0003】 伝染現象に用いられるリス型ハロゲン化銀写真感光材料は、例えば平均粒径が0.2μmで粒子分布が狭く粒子の形も整っていて、かつ塩化銀の含有率の高い（少なくとも50モル%以上）塩化銀乳剤よりなる。このリス型ハロゲン化銀写真感光材料を亜硫酸イオン濃度が低いアルカリ性ハイドロキノン現像液、いわゆるリス型現像液で処理することにより、高いコントラスト、高鮮鋭度、高解像力の画像が得られる。

【0004】 しかしながら、これらのリス型現像液は空気酸化を受けやすいことから保恒性が極めて悪いので、

連続使用の際において現像品質を一定に保つことは難しい。

【0005】 上記のリス型現像液を使わずに迅速に、かつ高コントラストの画像を得る方法が知られている。例えば特開昭56-106244号公報明細書等に記載されているようなヒドラジン誘導体を用いた方法である。これらの方法によれば、保恒性が良く、迅速処理可能な現像液で処理することによっても硬調な画像が得ることが出来る。

10 【0006】 一方、赤色波長領域で発光する例えばレーザー光源により記録するハロゲン化銀写真感光材料が印刷製版分野や医療分野で頻繁に使われるようになってきた。特に印刷製版分野においては、ファクシミリやカラーキャナフィルムが多数使用されており、光源としては632.8nmに出力波長を有するHeNeレーザーや650～700nmに出力波長を有する発光ダイオード(LED)や670～680nmに出力波長を有する赤色半導体レーザーなどが主に用いられている。

20 【0007】 これらの露光装置は、低コスト、軽量化の観点から平面走査タイプや内面走査タイプが主流になってきている。平面走査タイプや内面走査タイプで露光される場合は、フィルム上でフリンジが出やすいため、硬調な画像が得られる感光材料を使用することが好ましい。好ましい感光材料のうちのひとつとして、前記のようなヒドラジン誘導体と600～700nmに分光増感させるパンクロマチック増感色素を組み合わせた方法を利用することができる。具体的な例としては、特開平2-124560号、同2-125248号、同3-100543号公報明細書等に記載がある。

30 【0008】 ハロゲン化銀写真感光材料には、上記のような赤色光源において高い分光増感特性と併せて、現像処理後の残色汚染性の改良及び感光材料の保存安定性の向上が重要な技術である。

【0009】 特に最近の動向として処理の迅速化、簡素化あるいは低補充化等により、処理時の残色汚染が不十分になりやすい。その結果、性能上支障をきたし、商品価値を損なうという問題が生じている。

40 【0010】 上記の具体的な例に記載されているパンクロ増感色素を用いた感光材料は、残色汚染の除去が不十分であった。また保存時、特に高温下で保存した場合には、未露光部に砂状の欠陥、いわゆる黒ポツが発生しやすく問題であった。

【0011】 本発明の一般式【I】の増感色素を含有する感光材料は特開平3-171135号に記載されているが、ヒドラジン誘導体を利用した感光材料には言及しておらず、黒ポツ改良技術としての示唆はなく、また一般式

【I】の増感色素で分光増感された感光材料をヒドラジン誘導体の存在下で現像することがスイス特許677409号に開示されているが、フェニルヒドラジンを現像液に添加した例が記載されているだけで、一般式【I】の増感

色素で分光増感された感光材料中にヒドラジン誘導体を含有することで硬調でかつ黒ボツが良いことは記載されていない。

【0012】水溶性基を有する増感色素を添加することで黒ボツを改良することが、特開昭63-108335号公報等に開示されているが、記載されているパンクロ増感色素では安全光によりカブリが上昇するという問題があった。

【0013】さらにパンクロマチック増感色素を用いた場合、赤色域に感光領域を持つため、安全光として450～550nmの青緑域の光を使用するのが通常である。しかしながらパンクロ用の安全光は感光材料の感光波長と重なり、明るくできないため暗室作業に支障があった。

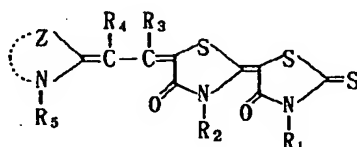
【0014】

【発明の目的】本発明の第1の目的は、赤色波長域に高感度を有し、かつ現像処理後の残色汚染の少ないハロゲン化銀感光材料を提供することにある。

【0015】本発明の第2の目的は、高温下で保存した場合にも黒ボツの発生が少ないハロゲン化銀感光材料を提供することにある。

\* 20

#### 一般式【I】



【0020】式中、Zはチアゾール、ベンゾチアゾール、ナフトチアゾール、セレナゾール、ベンゾセレナゾール、ナフトセレナゾール環を完成するに必要な原子群を表す。R<sub>1</sub>、R<sub>2</sub>、R<sub>3</sub>、R<sub>4</sub>及びR<sub>5</sub>はそれぞれ同じか又は異なってもよく水素原子、アルキル基、置換アルキル基又はアリール基を表す。ただし、R<sub>1</sub>、R<sub>2</sub>、R<sub>3</sub>、R<sub>4</sub>及びR<sub>5</sub>のうち少なくとも2つは、水溶性基を担持した有機基を表す。

【0021】上記一般式【I】に於いて、R<sub>1</sub>～R<sub>5</sub>のうちの少なくとも2つが水溶性基を担持する有機基を表すが、ここで言う水溶性基とは、化合物の構造と生理活性との関係をとらえた所謂構造活性相関にて用いられるHansch法のπ値が負の値を有するものを指す。なお、Hansch法に関してはJ. Med. Chem., 16, 1207 (1973)、同20, 304 (1979)に詳細に記載されている。R<sub>1</sub>～R<sub>5</sub>のうちの少なくとも3つが水溶性基を担持する有機基であることが好ましい。

【0022】これらの水溶性基のうち、水溶液中でイオン化し、かつそのpKaが4以上11以下のものを1つ以上有する色素が好ましい。特に好ましくは1つ以上が4～11で、かつ1つ以上が4以下のpKaを有する有機基が分光感度が優れ、かつ残色汚染性が少ない特長を有する。最も好ましくは2つ以上が4～11で、かつ1つ以上

\* 【0016】本発明の第3の目的は、安全光すなわちセーフライトに対してカブリの生じにくいハロゲン化銀感光材料を提供することにある。

【0017】

【発明の構成】本発明の上記目的は、支持体上に少なくとも1層のハロゲン化銀乳剤層を有するハロゲン化銀写真感光材料において、下記一般式【I】から選ばれる少なくとも1種の分光増感色素により実質的に600～700nmに感光域を有するように分光増感され、かつ該ハロゲン化銀乳剤層及び／又はその隣接層中に下記一般式【H】で表されるヒドラジン誘導体を含有することを特徴とするハロゲン化銀写真感光材料により達成される。

【0018】尚、前記水溶性基のうちの少なくとも2つが、水溶液中でイオン化できる酸及び塩基であって、かつpKaが4～11の水溶性基を有した増感色素であり、さらに前記水溶性基のうちの少なくとも1つがpKaが4以下の水溶性基を有した増感色素であることが好ましい態様である。

【0019】

【化2】

が4以下のpKaを有する色素である。

【0023】好ましいpKaを示す具体的な官能基例の1例を下記に示すが、本発明はこれらのみに限定されるものではない。

【0024】pKaが4～11のもの

—(CH<sub>2</sub>)<sub>n</sub>COOM、—C<sub>6</sub>H<sub>4</sub>COOM、—CH<sub>2</sub>C<sub>6</sub>H<sub>4</sub>COOM、—CH<sub>2</sub>—CH=CH—CH<sub>2</sub>COOM、

—(CH<sub>2</sub>)<sub>2</sub>SO<sub>2</sub>NHC<sub>6</sub>H<sub>4</sub>、—CH<sub>2</sub>CH<sub>2</sub>CONH<sub>2</sub>

pKaが4以下のもの

—(CH<sub>2</sub>)<sub>n</sub>SO<sub>3</sub>M、—C<sub>6</sub>H<sub>4</sub>SO<sub>3</sub>M、—CH<sub>2</sub>C<sub>6</sub>H<sub>4</sub>SO<sub>3</sub>M、—CH<sub>2</sub>—CH=CH—CH<sub>2</sub>SO<sub>3</sub>M

—CH<sub>2</sub>CH(SO<sub>3</sub>M)CH<sub>3</sub>

上記の式中、nは2～4を表し、Mは水素原子、アルカリ金属原子又はアンモニウム基、有機アミン基を表す。

【0025】R<sub>5</sub>は水溶性基であることが好ましい。

【0026】さらに好ましくは、R<sub>5</sub>が水溶性基で、かつR<sub>1</sub>及びR<sub>2</sub>が共に水溶性基である。

【0027】一般式【I】において、R<sub>1</sub>～R<sub>5</sub>の上記以外の置換基としては、アルキル基としては直鎖、分岐、環状のいずれでもよく好ましくは炭素数8までの例えばメチル、エチル、プロピル、ブチル、ペンチル、シクロペンチル、ヘキシル、シクロヘキシル、ヘプチル、オクチル基などが挙げられる。

【0028】置換アルキル基の好ましい置換基の例としてはハロゲン原子(例えばクロール、ブローム、フッ素原子など)、ヒドロキシ基、炭素数6~12の単環または2環のアリール基(このアリール基には例えばフェニル基に炭素数4までのアルキル基又はニトロ基、ハロゲン原子などを置換していてもよい)。炭素数4までのアルコキシカルボニル基(例えばエトキシカルボニル基など)、炭素数4までのアシル基(例えばアセチル基、ベンゾイル基でこのベンゼン環にはニトロ基やハロゲン原子などを置換していてもよい)、炭素数4までのアルコキシ基(例えばメトキシ基、エトキシ基など)が挙げられる。

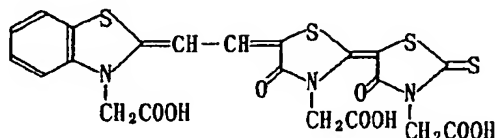
【0029】アリール基としては置換基を有していてもよいフェニル基又はナフチル基で、置換基の例としては炭素数4までのアルキル基(例えばメチル基、エチル基、イソプロピル基など)を挙げることができる。 \*

\* 【0030】上記一般式【I】においてZで表わされるチアゾール、ベンゾチアゾール、ナフトチアゾール、セレナゾール、ベンゾセレナゾール及びナフトセレナゾール環にはそれぞれ分光増感色素に用いられる通常の置換基を有していてもよく、置換基としては例えば上記のR<sub>1</sub>~R<sub>5</sub>に置換されてもよい基と同様のアルキル基、置換アルキル基、アリール基、ハロゲン原子の他に、スルホンアミド基(例えば炭素数4までのアルキル基を置換したスルホンアミド基など)、カルバモイル基(例えば非置換カルバモイル基、メチルカルバモイル基、フェニルカルバモイル基など)が好ましく挙げられる。以下に本発明の一般式【I】で表わされる分光増感色素の具体例を示すが、本発明はこれらに限定されるものではない。

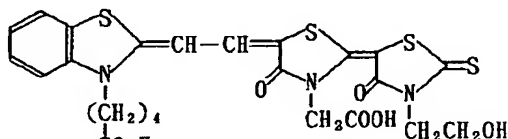
【0031】

【化3】

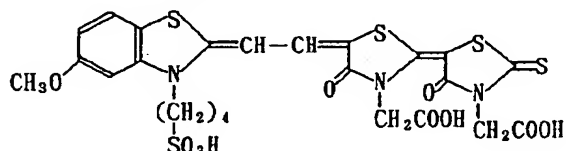
1 - 1



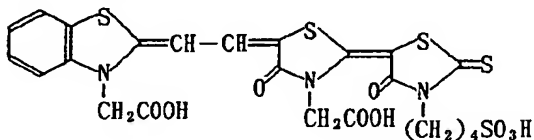
1 - 2



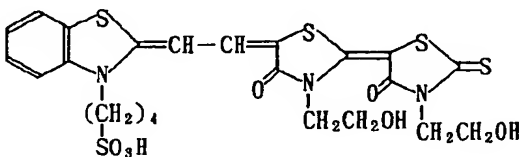
1 - 3



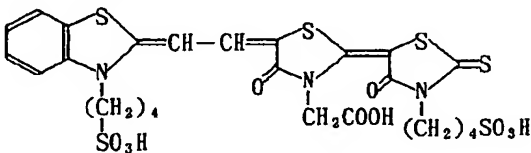
1 - 4



1 - 5



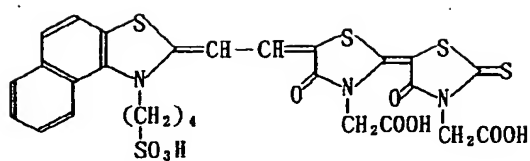
1 - 6



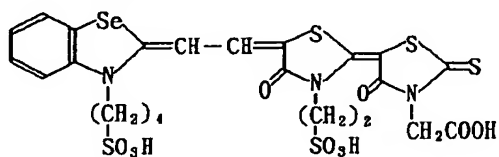
【0032】

\* \* 【化4】

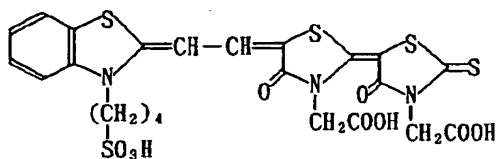
1 - 7



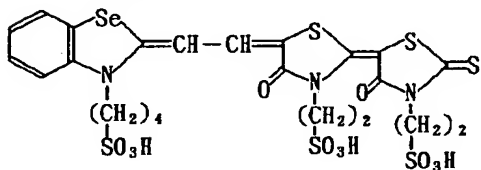
1 - 8



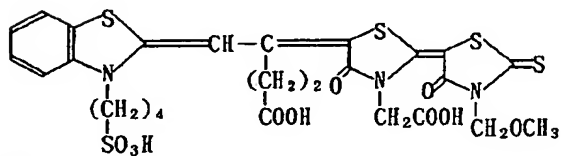
1 - 9



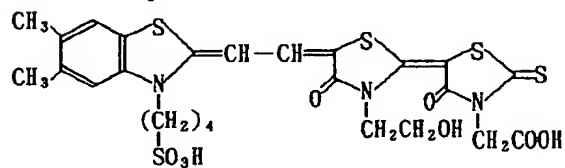
1 - 10



1 - 11



1 - 12

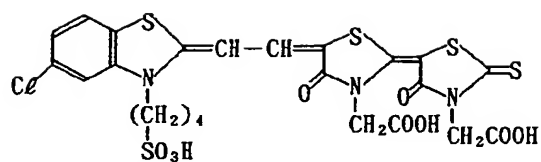


【0033】

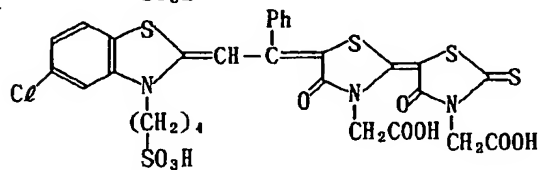
【化5】



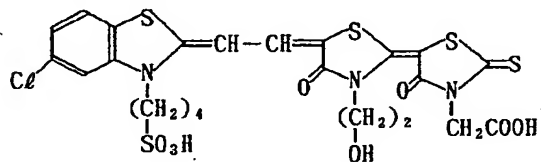
1 - 13



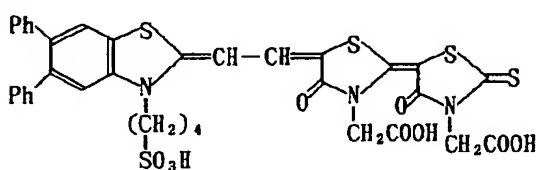
1 - 14



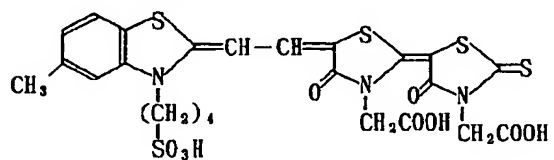
1 - 15



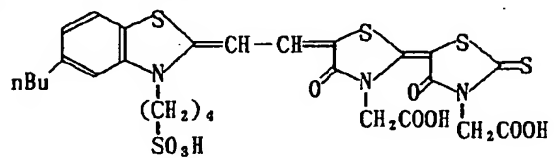
1 - 16



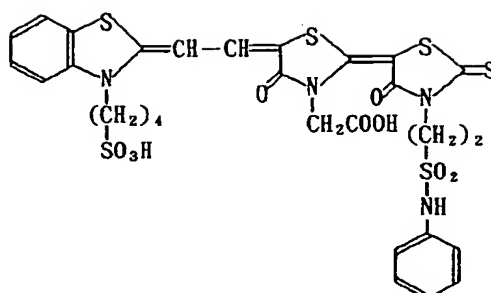
1 - 17



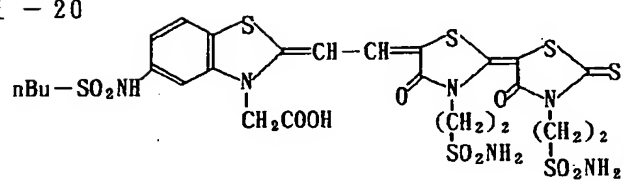
1 - 18



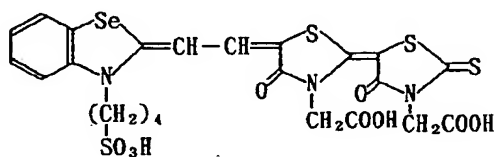
1 - 19



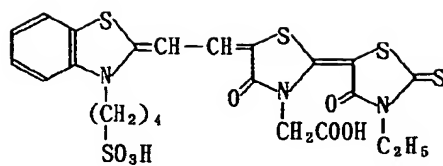
1 - 20



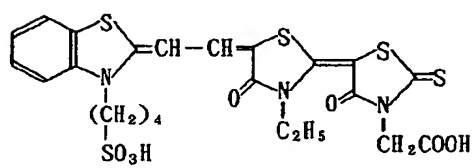
1 - 21



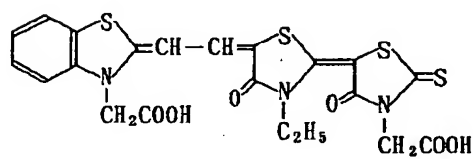
1 - 22



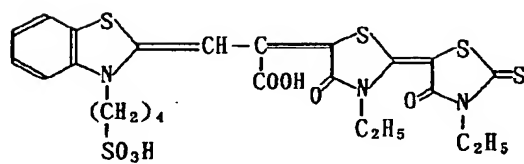
1 - 23



1 - 24



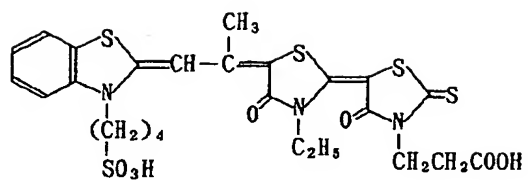
1 - 25



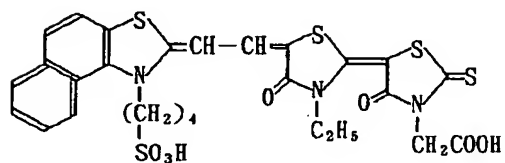
【0036】

【化8】

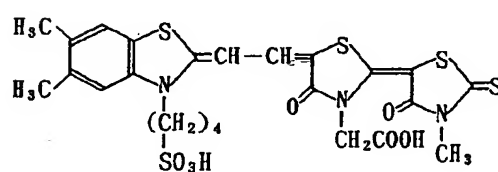
1 - 26



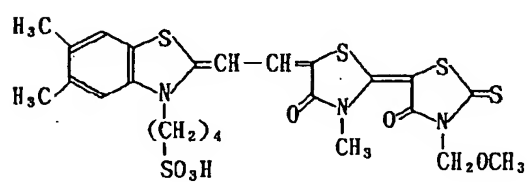
1 - 27



1 - 28



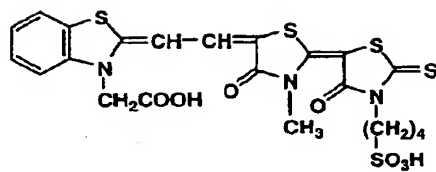
1 - 29



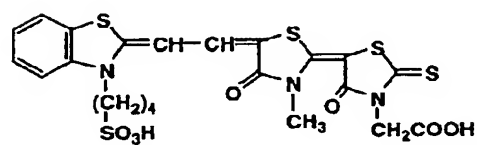
【0037】

【化9】

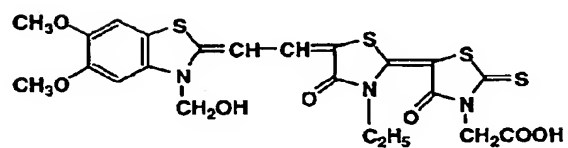
1-30



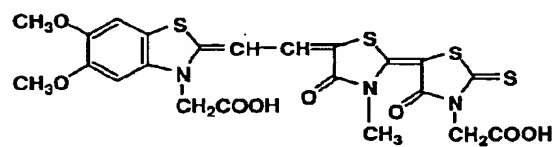
1-31



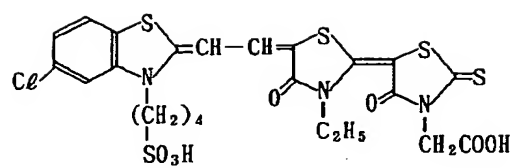
1-32



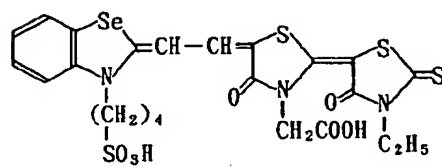
1-33



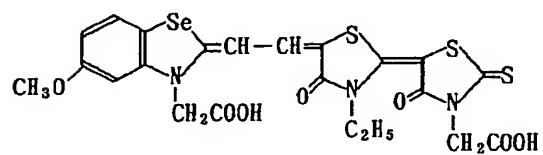
1 - 34



1 - 35



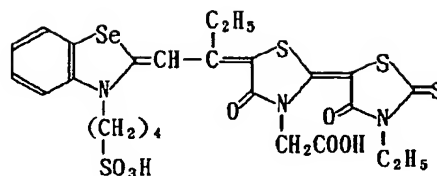
1 - 36



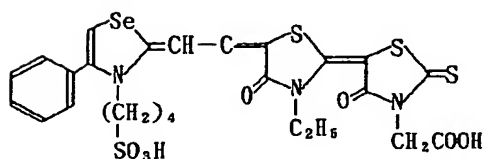
[0039]

【化11】

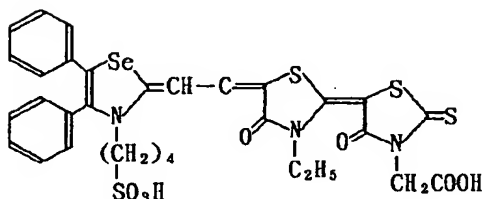
1 - 37



1 - 38



1 - 39

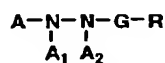


【0040】上記のメロシアニン色素は例えば米国特許 2493747号、同2656351号に記載の方法又はそれに準じた合成法により得ることができる。次に本発明に用いられる下記一般式〔H〕で表されるヒドラジン誘導体について説明する。

【0041】

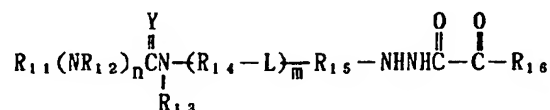
〔化12〕

一般式〔H〕



【0042】式中、Aは置換アリール基、又は硫黄原子又は酸素原子を少なくとも一つ含む複素環基を表し、Gは $-(\text{CO})_n$ -基、スルホニル基、スルホキシ基、 $-*$

一般式〔H-a〕



【0044】上記一般式〔H-a〕中、 $\text{R}_{11}$ および $\text{R}_{12}$

30 \*  $\text{PO}(\text{R})$ -基、又はイミノメチレン基を表し、nは1又は2の整数を表し、 $\text{A}_1$ 、 $\text{A}_2$ は共に水素原子或いは一方が水素原子で他方が置換もしくは無置換のアルキルスルホニル基、又は置換もしくは無置換のアシル基を表し、Rは水素原子、置換もしくは無置換のアルキル基、アリール基、アルコキシ基、アリールオキシ基、アミノ基、カルバモイル基、オキシカルボニル基又は $-\text{O}-\text{R}_4$ 基を表し、 $\text{R}_4$ は置換もしくは無置換のアルキル基又は飽和複素環基を表す。本発明においてはこれらのうち更に下記一般式〔H-a〕、〔H-b〕、〔H-c〕又は〔H-d〕で表される化合物が好ましい。

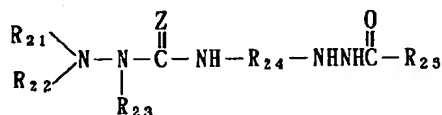
【0043】

〔化13〕

50 それぞれ水素原子、置換もしくは無置換のアルキル基

(例えばメチル基、エチル基、ブチル基、ドデシル基、2-ヒドロキシプロピル基、2-シアノエチル基、2-クロロエチル基)、置換もしくは無置換のフェニル基、ナフチル基、シクロヘキシル基、ピリジル基、ピロリジル基 (例えばフェニル基、p-メチルフェニル基、ナフチル基、 $\alpha$ -ヒドロキシナフチル基、シクロヘキシル基、p-メチルシクロヘキシル基、ピリジル基、4-プロピル-2-ピリジル基、ピロリジル基、4-メチル-2-ピロリジル基) などを表し、R<sub>13</sub>は水素原子、置換もしくは無置換のベンジル基、アルコキシ基またはアルキル基 (例えばベンジル基、p-メチルベンジル基、メトキシ基、エトキシ基、エチル基、ブチル基) を表し、R<sub>14</sub>およびR<sub>15</sub>はそれぞれ2価の芳香族基 (例えばフェニレン基またはナフチレン基) を表し、Yはイオウ原子または酸素原子を表し、Lは2価の結合基 (例えば-SO<sub>2</sub>CH<sub>2</sub>CH<sub>2</sub>NH-、-SO<sub>2</sub>NH-、-OCH<sub>2</sub>SO<sub>2</sub>NH-、-O-、-CH=N-) を表し、\*

## 一般式 [H - b]



【0047】式中、R<sub>21</sub>、R<sub>22</sub>およびR<sub>23</sub>はそれぞれ水素原子、アルキル基 (例えばメチル基、エチル基、ブチル基、3-アリーールオキシプロピル基)、置換もしくは無置換のフェニル基、ナフチル基、シクロヘキシル基、ピリジル基、ピロリジル基、置換もしくは無置換のアルコキシ基 (例えばメトキシ基、エトキシ基、ブトキシ基) または置換もしくは無置換のアリーールオキシ基 (例えばフェノキシ基、4-メチルフェノキシ基) を表わす。

【0048】本発明においてはR<sub>23</sub>は水素原子またはアルキル基であることが好ましい。

【0049】R<sub>24</sub>は2価の芳香族基 (例えばフェニレン基、ナフチレン基) を表わし、Zはイオウ原子または酸素原子を表わす。

\* R<sub>16</sub>は-NR' R'' または-OR<sub>17</sub>を表し、R'、R'' およびR<sub>17</sub>はそれぞれ水素原子、置換もしくは無置換のアルキル基 (例えばメチル基、エチル基、ドデシル基)、フェニル基 (例えばフェニル基、p-メチルフェニル基、p-メトキシフェニル基)、ナフチル基 (例えば $\alpha$ -ナフチル基、 $\beta$ -ナフチル基) または複素環基 (例えばピリジン、チオフェン、フランの様な不飽和複素環基またはテトラヒドロフラン、スルホランの様な飽和複素環基) を表し、R' とR'' は窒素原子と共に環 (例えばピペリジン、ピペラジン、モルホリン等) を形成しても良い。

【0045】mおよびnはそれぞれ0または1を表す。R<sub>28</sub>が-OR<sub>29</sub>を表すときYはイオウ原子を表すことが好ましい。

【0046】

【化14】

【0050】R<sub>25</sub>は置換もしくは無置換のアルキル基、アルコキシ基またはアミノ基を表わし、置換基としてはアルコキシ基、シアノ基、アリーール基などが挙げられる。

【0051】前記ヒドラジン誘導体は公知の方法により簡単に合成することができるが、例えば特開平2-214850号、同2-47646号、同2-12237号等の記載に準じて合成することができる。

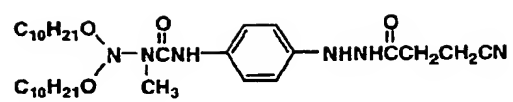
【0052】上記一般式 [H - a]、[H - b] で表される代表的な化合物を以下に示す。

【0053】

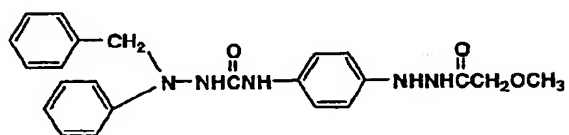
【化15】



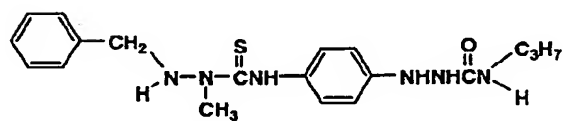
a-1



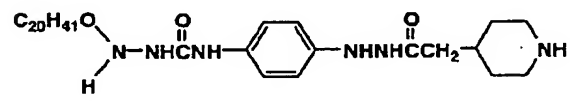
a-2



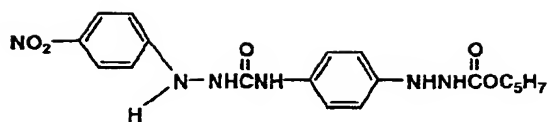
a-7



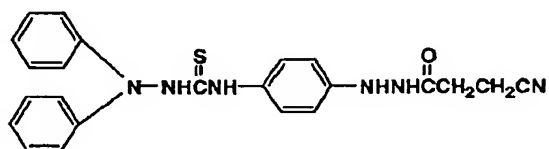
a-8



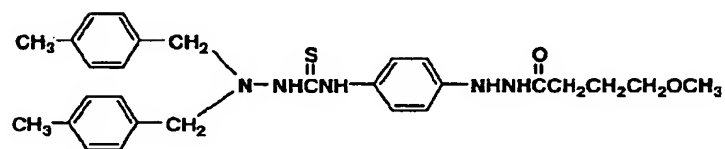
a-9



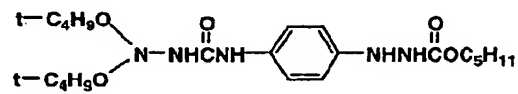
a-10



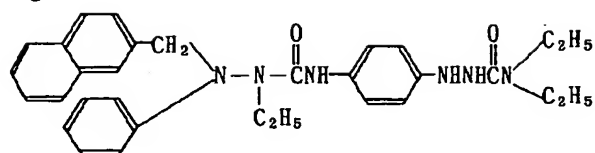
a-3



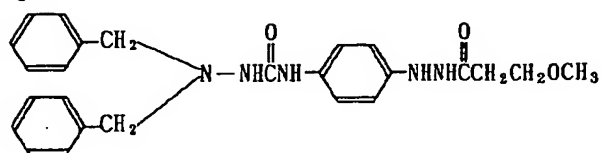
a-4



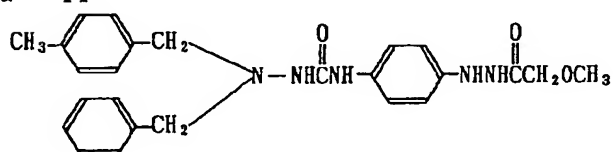
a - 5



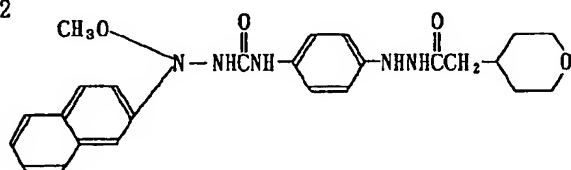
a - 6



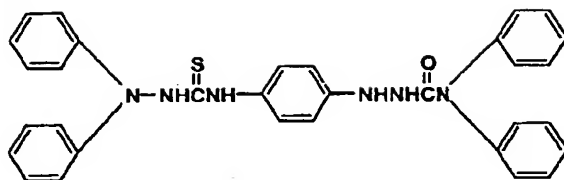
a - 11



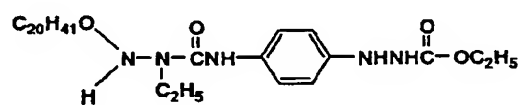
a - 12



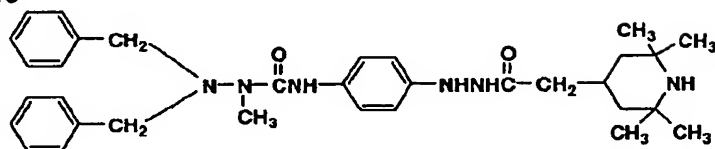
a-13



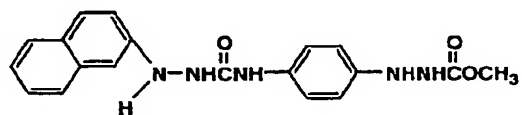
a-14



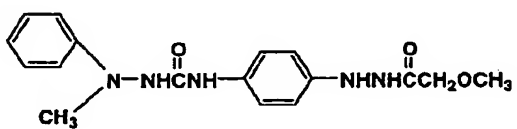
a-15



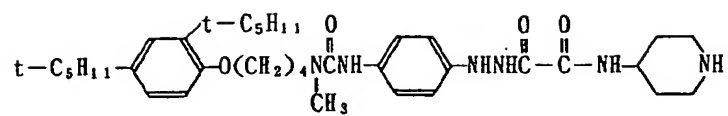
a-16



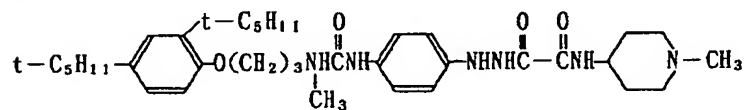
a-17



b - 1



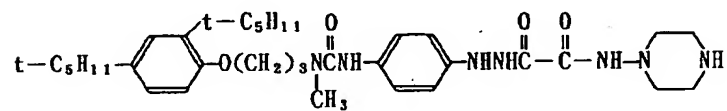
b - 2



b - 3



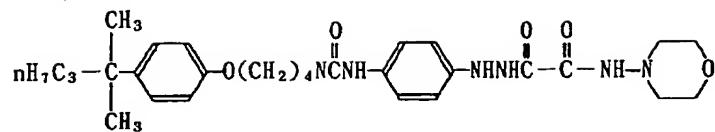
b - 4



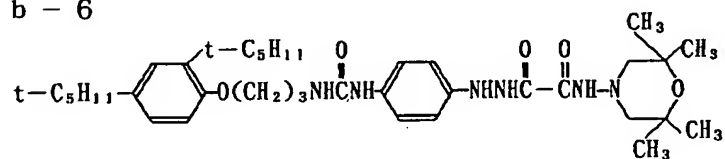
【0058】

【化20】

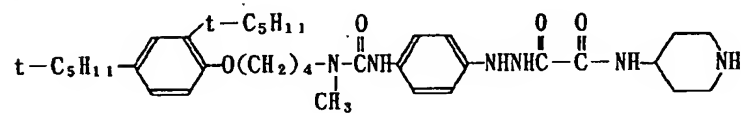
b - 5



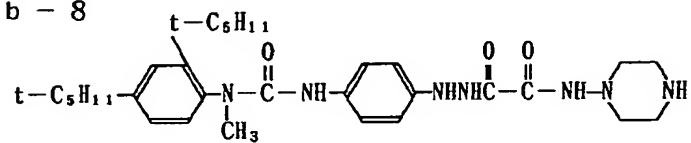
b - 6



b - 7



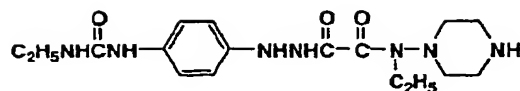
b - 8



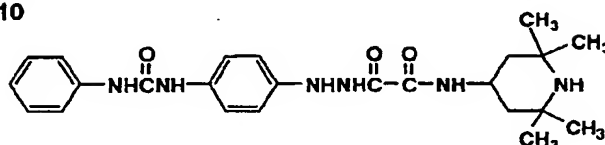
【0059】

【化21】

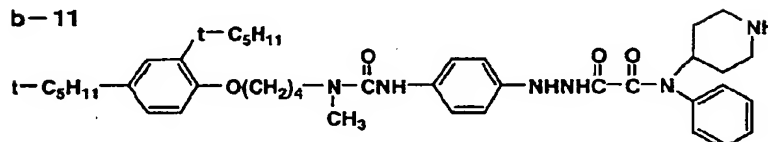
b-9



b-10



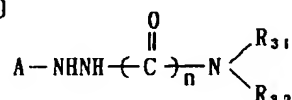
b-11



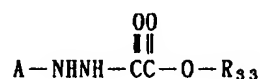
【0060】

\* \* 【化22】

一般式【H-c】



一般式【H-d】



【0061】式中、Aはアリール基、又は、硫黄原子又は酸素原子を少なくとも一つ含む複素環基を表し、nは1又は2の整数を表す。n=1の時、R<sub>31</sub>及びR<sub>32</sub>はそれぞれ水素原子、アルキル基、アルケニル基、アルキニル基、アリール基、複素環基、ヒドロキシ基、アルコキシ基、アルケニルオキシ基、アルキニルオキシ基、アリールオキシ基、又はヘテロ環オキシ基を表し、R<sub>31</sub>とR<sub>32</sub>は窒素原子と共に環を形成してもよい。n=2の時、R<sub>31</sub>及びR<sub>32</sub>はそれぞれ水素原子、アルキル基、アルケニル基、アルキニル基、アリール基、飽和又は不飽和複素環基、ヒドロキシ基、アルコキシ基、アルケニルオキシ基、アルキニルオキシ基、アリールオキシ基、又はヘテロ環オキシ基を表す。ただしn=2の時、R<sub>31</sub>及びR<sub>32</sub>のうち少なくとも一方はアルケニル基、アルキニル基、飽和複素環基、ヒドロキシ基、アルコキシ基、アルケニルオキシ基、アルキニルオキシ基、アリールオキシ

基、又はヘテロ環オキシ基を表すものとする。R<sub>33</sub>はアルキニル基又は飽和複素環基を表す。

【0062】一般式【A】又は【B】で表される化合物には、式中の-NHNH-の少なくともいずれかのHが置換基で置換されたものを含む。

【0063】更に詳しく説明すると、Aはアリール基（例えば、フェニル、ナフチル等）、又は、硫黄原子又は酸素原子を少なくとも一つ含む複素環基（例えば、チオフェン、フラン、ベンゾチオフェン、ピラン、等）を表す。

【0064】R<sub>31</sub>及びR<sub>32</sub>はそれぞれ水素原子、アルキル基（例えば、メチル、エチル、メトキシエチル、シアノエチル、ヒドロキシエチル、ベンジル、トリフルオロエチル等）、アルケニル基（例えば、アリル、ブテニル、ペンテニル、ペンタジエニル等）、アルキニル基（例えば、プロパルギル、ブチニル、ペンチニル等）、

40

50

アリール基（例えば、フェニル、ナフチル、シアノフェニル、メトキシフェニル等）、複素環基（例えば、ピリジン、チオフェン、フランの様な不飽和複素環基及びテトラヒドロフラン、スルホランの様な飽和複素環基）、ヒドロキシ基、アルコキシ基（例えば、メトキシ、エトキシ、ベンジルオキシ、シアノメトキシ等）、アルケニルオキシ基（例えば、アリルオキシ、ブテニルオキシ等）、アルキニルオキシ基（例えば、プロパルギルオキシ、ブチニルオキシ等）、アリールオキシ基（例えば、フェノキシ、ナフチルオキシ等）、又はヘテロ環オキシ基（例えば、ピリジルオキシ、ピリミジルオキシ等）を表し、 $n=1$ の時、 $R_{31}$ と $R_{32}$ は窒素原子と共に環（例えば、ピペリジン、ピペラジン、モルホリン等）を形成してもよい。

【0065】ただし $n=2$ の時、 $R_{31}$ 及び $R_{32}$ のうち少なくとも一方はアルケニル基、アルキニル基、飽和複素環基、ヒドロキシ基、アルコキシ基、アルケニルオキシ基、アルキニルオキシ基、アリールオキシ基又はヘテロ環オキシ基を表すものとする。 $R_{33}$ で表されるアルキニル基及び飽和複素環基の具体例としては、上述したようなものが挙げられる。

【0066】Aで表されるアリール基、又は、硫黄原子又は酸素原子を少なくとも一つ有する複素環基に、種々の置換基が導入できる。導入できる置換基としては例えばハロゲン原子、アルキル基、アリール基、アルコキシ基、アリールオキシ基、アシルオキシ基、アルキルチオ基、アリールチオ基、スルホニル基、アルコキシカルボニル基、アリールオキシカルボニル基、カルバモイル基、スルファモイル基、アシル基、アミノ基、アルキルアミノ基、アリールアミノ基、アシルアミノ基、スルホンアミド基、アリールアミノチオカルボニルアミノ基、ヒドロキシ基、カルボキシ基、スルホ基、ニトロ基、シアノ基などが挙げられる。これらの置換基のうちスルホンアミド基が好ましい。

【0067】各一般式中、Aは耐拡散基又はハロゲン化銀吸着促進基を少なくとも一つ含むことが好ましい。耐

拡散基としてはカブラー等の不動性写真用添加剤において常用されているバラスト基が好ましい。バラスト基は8以上の炭素数を有する写真性に対して比較的不活性な基であり、例えばアルキル基、アルコキシ基、フェニル基、アルキルフェニル基、フェノキシ基、アルキルフェノキシ基などの中から選ぶことができる。

【0068】ハロゲン化銀吸着促進基としてはチオ尿素基、チオウレタン基、複素環チオアミド基、メルカプト複素環基、トリアゾール基などの米国特許4,385,108号に記載された基が挙げられる。

【0069】一般式〔H-c〕及び〔H-d〕中の-NH-NH-のH、即ちヒドラジンの水素原子は、スルホニル基（例えばメタンスルホニル、トルエンスルホニル等）、アシル基（例えば、アセチル、トリフルオロアセチル、エトキシカルボニル等）、オキサリル基（例えば、エトキサリル、ビルボイル等）等の置換基で置換されていてもよく、一般式〔H-c〕及び〔H-d〕で表される化合物はこのようなものをも含む。

【0070】本発明においてより好ましい化合物は、一般式〔H-c〕の $n=2$ の場合の化合物、及び一般式〔H-d〕の化合物である。

【0071】一般式〔H-c〕の $n=2$ の化合物において、 $R_{31}$ 及び $R_{32}$ が水素原子、アルキル基、アルケニル基、アルキニル基、アリール基、飽和又は不飽和複素環基、ヒドロキシ基、又はアルコキシ基であり、かつ $R_{31}$ 及び $R_{32}$ のうち少なくとも一方はアルケニル基、アルキニル基、飽和複素環基、ヒドロキシ基、又はアルコキシ基を表す化合物が更に好ましい。

【0072】上記一般式〔H-c〕、〔H-d〕で表される代表的な化合物としては、以下に示すものがある。但し当然のことであるが、本発明において用い得る一般式〔H-c〕、〔H-d〕の具体的化合物は、これらの化合物に限定されるものではない。

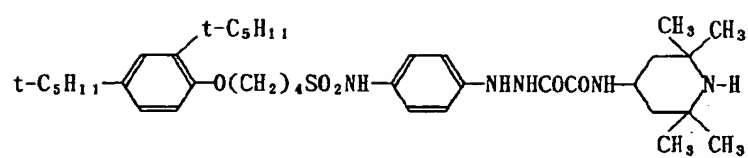
【0073】具体的化合物例

【0074】

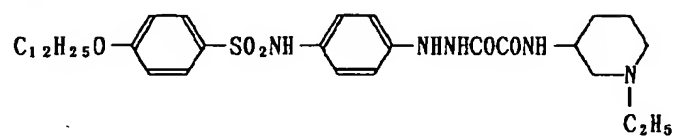
【化23】



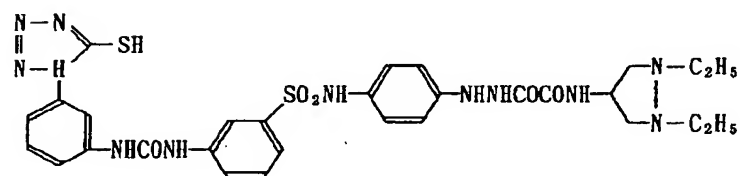
c - 1



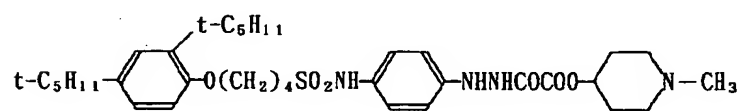
c - 2



c - 3



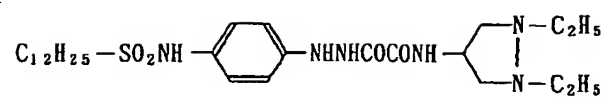
d - 1



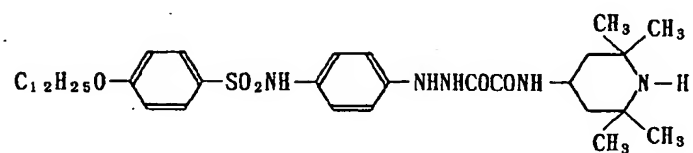
【0075】

【化24】

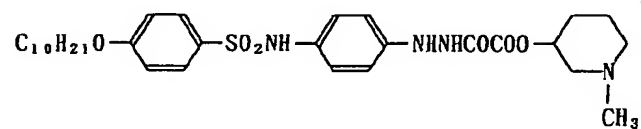
c - 4



c - 5



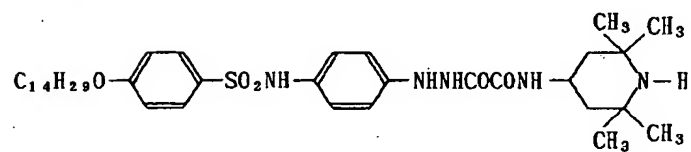
d - 2



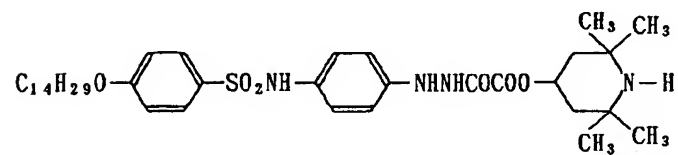
【0076】

\* \* 【化25】

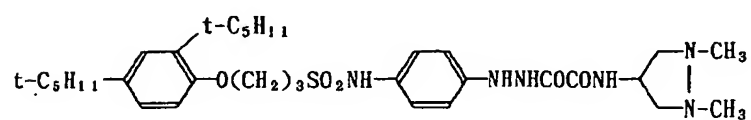
c - 6



d - 3



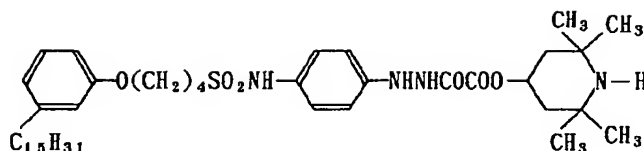
c - 7



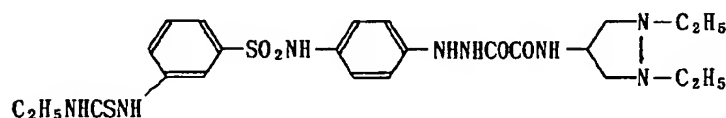
【0077】

【化26】

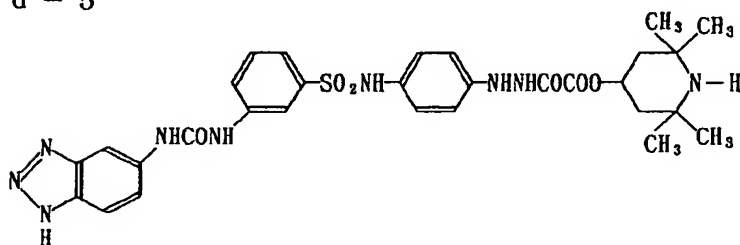
d - 4



c - 8



d - 5



【0078】上記以外の具体的化合物としては、特開平2-841号542(4)頁～546(8)頁に記載されている化合物例(1)～(61)及び(65)～(75)がある。

【0079】本発明におけるヒドラジン誘導体は特開平2-841号546(8)頁～550(12)頁に記載されている方法で合成することができる。本発明のヒドラジン誘導体の添加位置はハロゲン化銀乳剤層及び／又は隣接層である。添加量は銀1モル当たり $1 \times 10^{-6}$ ～ $1 \times 10^{-1}$ モルが好ましく、さらに好ましくは銀1モル当たり $1 \times 10^{-5}$ モル～ $1 \times 10^{-2}$ モルである。

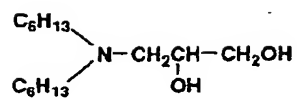
【0080】またヒドラジン誘導体として〔H-c〕又は〔H-d〕を含有する場合は、特願平2-234203号68頁1行～144頁12行に記載されている造核促進化合物の少なくとも1種を、ハロゲン化銀乳剤層及び／又は支持体上のハロゲン化銀乳剤層側にある非感光性層に含むことが好ましい。

【0081】造核促進剤の代表的具体例として以下に示すものが挙げられる。

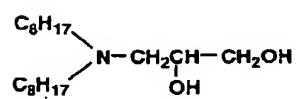
【0082】

〔化27〕

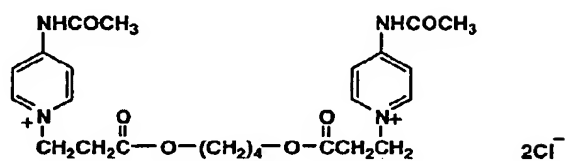
N-1



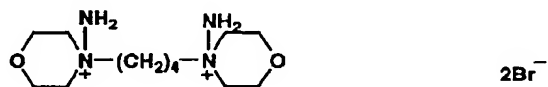
N-2



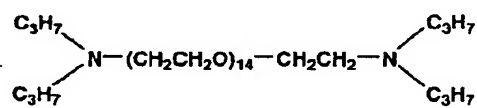
N-3



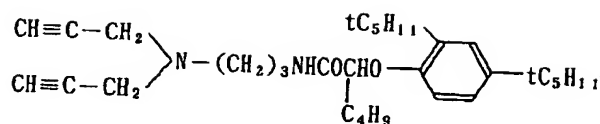
N-4



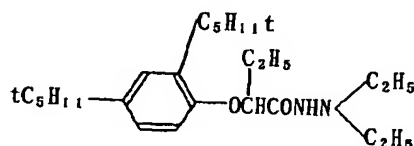
N-5



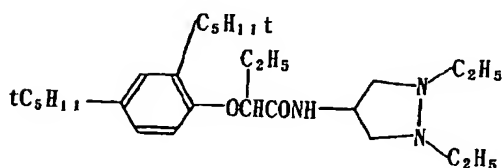
N - 6



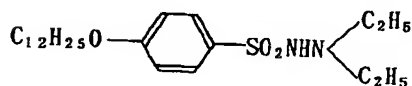
N - 7



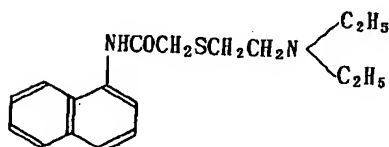
N - 8



N - 9



N - 10



【0084】更に他の具体例としては、特願平2-234203号69頁～72頁に記載されている化合物I-1～I-26、73頁～78頁に記載されている化合物II-1～II-29、80頁～83頁に記載されている化合物III-1～III-25、84頁～90頁に記載されている化合物IV-1～IV-41、92頁～96頁に記載されている化合物V-I-1～V-I-27、98頁～103頁に記載されている化合物V-II-1～V-II-30、105頁～111頁に記載されている化合物V-III-1～113頁～121頁に記載されている化合物VI-I-1～VI-I-44、123頁～135頁に記載されている化合物VI-II-1～VI-II-68及び137頁～143頁に記載されている化合物VI-III-1～VI-III-35の中の上述の代表的具体例以外のものがある。

【0085】本発明に使用されるハロゲン化銀乳剤（以下ハロゲン化銀乳剤乃至単に乳剤などと称する。）に

は、ハロゲン化銀として例えば臭化銀、沃臭化銀、沃塩化銀、塩臭化銀、及び塩化銀等の通常ハロゲン化銀乳剤に使用される任意のものをを用いることができるが、好ましくは、塩臭化銀、臭化銀又は4モル%以下の沃化銀を含む沃臭化銀である。

【0086】また（粒径の標準偏差）／（粒径の平均値）×100で表される変動係数15%以下である単分散粒子が好ましい。粒子形成中及び／又は形成後の過程でCd塩、In塩、Rh塩、Tl塩、Zn塩、Pb塩、Ir塩（銀塩を含む）を添加することが好ましい。特に好ましくはIr塩（錯塩を含む）を添加することである。添加量は銀1モル当り $1 \times 10^{-3}$ ～ $1 \times 10^{-8}$ モルが好ましい。

【0087】本発明のハロゲン化銀乳剤には当業界公知の各種技術、添加剤等を用いることができる。

【0088】例えば、本発明で用いるハロゲン化銀写真乳剤及びバックング層には、各種の化学増感剤、色調剤、硬膜剤、界面活性剤、増粘剤、可塑剤、スベリ剤、現像抑制剤、紫外線吸収剤、イラジェーション防止剤染料、重金属、マツト剤等を各種の方法で更に含有させることができる。又、本発明ハロゲン化銀写真乳剤及びバックング層中にはポリマーラテックスを含有させること\*

## 添加剤種類

1. 化学増感剤
2. 感度上昇剤
3. 分光増感剤  
強色増感剤
4. 増白剤
5. かぶり防止剤および安定剤
6. 光吸収剤、フィルター染料  
紫外線吸収剤
7. ステイン防止剤
8. 色素画像安定剤
9. 硬膜剤
10. バインダー
11. 可塑剤、潤滑剤
12. 塗布助剤、表面活性剤
13. スタチャック防止剤

本発明のハロゲン化銀写真感光材料に用いることができる支持体としては、酢酸セルロース、硝酸セルロース、ポリエチレンテレフタレートのようなポリエステル、ポリエチレンのようなポリオレフィン、ポリスチレン、バライタ紙、ポリオレフィンを塗布した紙、ガラス、金属等を挙げることができる。これらの支持体は必要に応じて下地加工が施される。

【0091】本発明に係るハロゲン化銀写真感光材料は露光後種々の方法、例えば通常用いられる方法により現像処理することができる。

【0092】黑白現像液は、ヒドロキシベンゼン類、アミノフェノール類、アミノベンゼン類等の現像主薬を含むアルカリ溶液であり、その他のアルカリ金属塩の亜硫酸塩、炭酸塩、重亜硫酸塩、特開昭56-106244号に記載されているようなアミノ化合物、臭化物及び沃化物等を含むことができる。現像液のpHは10.2~12.0であることが好ましい。

## 【0093】

【実施例】以下に実施例を用いて本発明を具体的に説明するが、本発明の実施の態様はこれらに限定されるものではない。

※

\*ができる。

【0089】これらの添加剤は、より詳しくは、リサーチディスクロージャ第176巻Item/7643 (1978年12月) および同187巻Item/8716 (1979年11月) に記載されており、その該当箇所を後掲の表にまとめて示した。

## 【0090】

RD/7643	RD/8716
23頁	648頁右欄
	同上
23~24頁	648頁右欄~ 649頁右欄
24頁	
24~25頁	649頁右欄
25~26頁	649頁右欄~ 650頁左欄
25頁右欄	650頁左~右欄
25頁	
26頁	651頁左欄
26頁	同上
27頁	650頁右欄
26~27頁	同上
27頁	同上

## ※【0094】実施例1

(ハロゲン化銀乳剤粒子の調製) 臭化銀98モル%、沃化銀2モル%のハロゲン化銀組成を有するハロゲン化銀乳剤を50℃、pA g7.8、pH2.0の条件下で調製した。銀イオンおよびハロイドイオンの供給は同時混合法を用い、その際、供給量は形成されたハロゲン化銀粒子の成長に伴い、表面積比例で増大させた。さらに、粒子形成終了直前にK<sub>2</sub>IrCl<sub>6</sub>を銀1モル当たり6×10<sup>-7</sup>モル添加し、粒子形成終了後銀1モル当たり0.3モルの沃化カリウムを用いて一部ハロゲン置換を実施した。その後常法により脱塩を行い、下記化合物【A】、【B】、【C】の混合物を含むオセインゼラチン溶液を添加し再分散した。

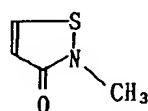
【0095】得られた乳剤は平均粒径0.2μm、変動係数、10%の立方体粒子からなる乳剤であった。本発明の

【I】で示される化合物又は比較化合物を銀1モル当たり4.5×10<sup>-4</sup>モル添加した後、イオウを添加して化学増感を行った。

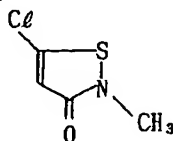
## 【0096】

## 【化29】

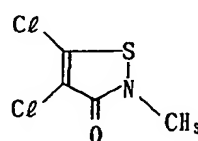
【A】



【B】



【C】



【0097】（ハロゲン化銀写真感光材料の調製）両面に厚さ $0.1\mu\text{m}$ の下塗層（特開昭59-19941号の実施例1参照）を設けた厚さ $100\mu\text{m}$ のポリエチレンテレフタレートフィルム的一方の下塗層上に、下記処方（1）のハロゲン化銀乳剤層をゼラチン量が $2.0\text{g}/\text{m}^2$ 、銀量 $3.2\text{g}/\text{m}^2$ になる様に塗設し、さらにその上に下記処方（2）の保護\*

\*層をゼラチン量が $1.0\text{g}/\text{m}^2$ になる様に塗設し、また反対側のもう一方の下塗層上には下記処方（3）に従ってバッキング層をゼラチン量が $2.4\text{g}/\text{m}^2$ になる様に塗設し、さらにその上に下記処方（4）の保護層をゼラチン量が $1.0\text{g}/\text{m}^2$ になる様に塗設して試料を得た。

【0098】

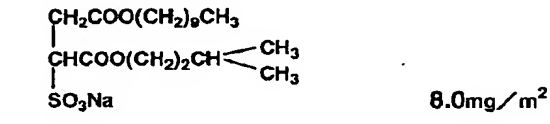
処方（1）（ハロゲン化銀乳剤層組成）

ゼラチン	$2.0\text{g}/\text{m}^2$
ハロゲン化銀乳剤 銀量	$3.2\text{g}/\text{m}^2$
カブリ防止剤：5-ニトロインダゾール	$10\text{mg}/\text{m}^2$
：1-フェニル-5-メルカプトテトラゾール	$2\text{mg}/\text{m}^2$
安定剤：4-メチル-6-ヒドロキシ-1,3,3a,7-テトラザインデン	$30\text{mg}/\text{m}^2$
ヒドラジン誘導体（表1に示す）	$3\times 10^{-5}\text{モル}/\text{m}$
2	
界面活性剤：ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム	0.1
$\text{g}/\text{m}^2$	

【0099】

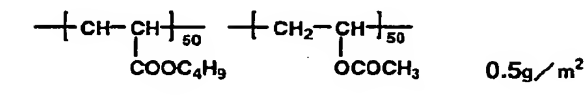
※ ※ 【化30】

S-1:



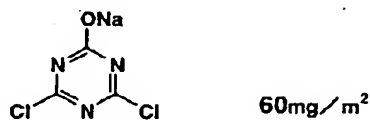
ポリエチレングリコール分子量4000  $0.1\text{g}/\text{m}^2$

ラテックスポリマー:



増感色素: 表1に示すとおり

硬膜剤 H-1



【0100】

処方（2）（乳剤保護層組成）

57

ゼラチン

マツト剤：平均粒径3.5 $\mu$ mのシリカ

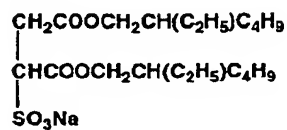
【0101】

\* \* 【化31】

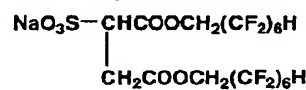
58

0.9g/m<sup>2</sup>10mg/m<sup>2</sup>

界面活性剤：S-2

10g/m<sup>2</sup>

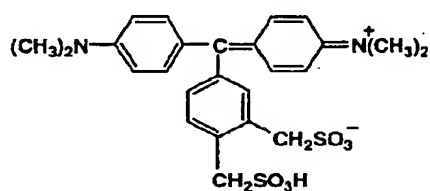
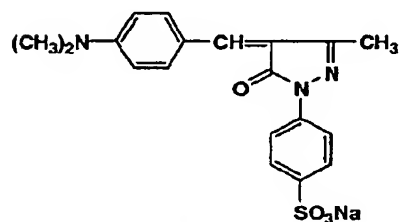
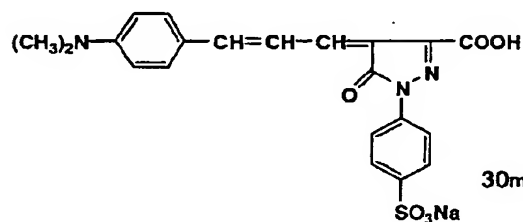
: S-3

2g/m<sup>2</sup>

硬膜剤：ホルマリン

30g/m<sup>2</sup>

処方(3) (バックング層組成)

80mg/m<sup>2</sup>30mg/m<sup>2</sup>30mg/m<sup>2</sup>

【0102】

ゼラチン

2.4g/m<sup>2</sup>

界面活性剤：ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム

0.1mg/m<sup>2</sup>

S-1:

6.0mg/m<sup>2</sup>

処方(4) (バックング保護層組成)



59	60
ゼラチン	1g/m <sup>2</sup>
マツト剤：平均粒径3.0～5.0μmのポリメチル メタクリレート	50mg/m <sup>2</sup>
界面活性剤：S-2	10mg/m <sup>2</sup>
硬膜剤：グリオキザール	25mg/m <sup>2</sup>
：H-1	35mg/m <sup>2</sup>

得られた試料について、下記試験方法に従い品質試験を行い、試料の評価をした。その結果を表1に示す。

【0103】（黒ボツ品質性試験方法）大日本スクリーン（株）製、製版用スキャナーSG747RUにて網点の10パターン露光を行った。この試料を下記に示す現像液処方および下記定着液処方による現像液と定着液を投入した迅速処理用自動現像機にて下記の条件で現像処理を行った。

【0104】網点を100倍のルーペで観察し、網点中に全く黒ボツの発生していないものを最高ランク「5」とし、網点中に発生する黒ボツの発生度に応じてランク「4」、「3」、「2」、「1」とそのランクを順次下げて評価するものとした。なお、ランク「1」及び「2」では黒ボツも大きく実用上好ましくないレベルである。

【0105】又得られた試料を、23℃50%RHの条件で24時間保存後、密閉包装し（保存I）、高温保存条件として55℃で3日間放置した（保存II）。このサーモ処理した試料を同様に露光、現像定着処理を行った。

【0106】（感度、セーフライト性及び残色の評価）得られた試料フィルムを夫々ヘリウムネオンレーザー\*

\*で露光し、処理条件は下記の通りである。

【0107】また試料フィルムの未露光試料を、60Wのタングステンランプにコニカ製セーフライトフィルターNo.5Aを通した緑色灯下1mの距離に置き、30分間放置した場合の、カブリ濃度を、それぞれ常法によって測定した。

【0108】カブリ濃度0.08以上は大きな欠点とされるレベルである。

【0109】各試料の感度、及び各条件でのカブリ濃度の測定結果を、表2に示した。なお感度は、カブリ濃度+3.0での露光量の逆数でNo.101の感度を100とした相対感度で表した。

【0110】また、露光をかけずに処理をした試料について4枚重ねをし、フィルムの残色を目視評価し5段階評価を行い、“5”は無色、“1”は強い青～紫色の残色を示した。一般製版用として“3”を下廻る残色は大きな欠点とされるレベルである。

【0111】〈処理条件〉処理条件は以下の通りである。

【0112】

#### 〔現像液処方〕

重亜硫酸ナトリウム	40g
N-メチル-P-アミノフェノール硫酸塩	350mg
エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム塩	1g
塩化ナトリウム	5g
臭化カリウム	

1. 2g

リン酸三ナトリウム

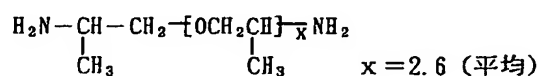
75g

5-メチルベンズトリアゾール	250mg
2-メルカプトベンズチアゾール	23mg
ベンズトリアゾール	83mg
ハイドロキノン	29g
ジイソプロピルアミノエタノール	2.3ml
アミン化合物Am-1	0.5ml
水酸化カリウム	使用液のpHを11.6にする量
使用時に水を加えて1lに仕上げた。	

【0113】

※ ※ 【化32】

アミン化合物Am-1



61

62

【0114】

## 〔定着液処方〕

チオ硫酸アンモニウム (59.5% W/V水溶液)	830ml
エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム塩	515mg
亜硫酸ナトリウム	63g
ホウ酸	22.5g
酢酸 (90% W/V水溶液)	82g
クエン酸 (50% W/V水溶液)	15.7g
グルコン酸 (50% W/W水溶液)	8.55g
硫酸アルミニウム (48% W/W水溶液)	13ml
グルタルアルデヒド	3g
硫酸	使用液のpHを4.6にする量

使用時に水を加えて1 lに仕上げた。

【0115】〔現像処理条件〕

乾 燥 40℃ 15秒

工 程	温度	時間
現 像	38℃	20秒
定 着	38℃	20秒
水 洗	常温	15秒

この結果を表1に示す。

【0116】

【表1】

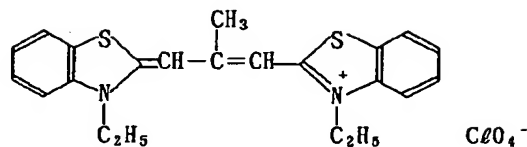
No	〔1〕の化合物 化合物No	ヒドラジン誘導体 化合物No	感度	残色	セーフライト 0分放置	カブリ濃度 No5A30分放置	黒ボツ		備考
							保存 I	保存 II	
101	D-1	a-6	100	1.5	0.04	0.31	2	1	比較
102	D-2	a-6	60	3	0.04	0.32	4	2	比較
103	D-3	a-6	55	3	0.04	0.29	4	2	比較
104	1-2	a-6	120	4.5	0.04	0.06	5	5	本発明
105	1-3	a-6	125	5	0.04	0.06	5	5	本発明
106	1-9	a-6	125	5	0.04	0.06	5	5	本発明
107	1-21	a-6	125	5	0.04	0.06	5	5	本発明
108	1-31	a-6	130	4	0.04	0.06	4	4	本発明
109	1-9	a-7	125	5	0.04	0.06	5	5	本発明
110	1-9	b-3	140	5	0.04	0.06	4.5	4.5	本発明
111	1-21	b-3	140	5	0.04	0.06	4.5	4.5	本発明
112	1-3	b-7	140	5	0.04	0.06	4.5	4.5	本発明

【0117】

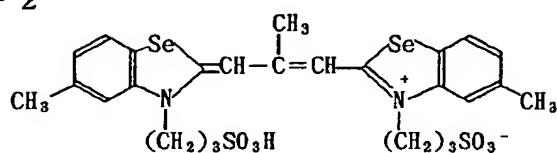
【化33】

## 比較化合物

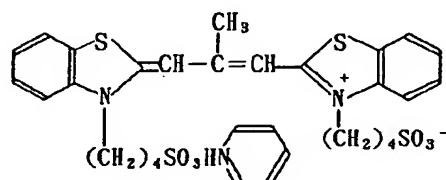
D - 1



D - 2



D - 3



【0118】表1の結果から、本発明の試料は、残色が少なく、セーフライト性も良好で、かつ黒ボツの発生も少ないことがわかる。

【0119】実施例2

\* ハロゲン化銀乳剤層中に造核促進剤N-10を  $3 \times 10^{-5}$  モル/ $m^2$  添加し、現像液として下記処方にした以外は、実施例1と同様に行った。結果を表2に示す。

\* 【0120】

〔現像液処方〕

(組成A)

純水 (イオン交換水)	150ml
エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム塩	2g
ジエチレングリコール	50g
亜硫酸カリウム (55% W/V水溶液)	100ml
炭酸カリウム	50g
ハイドロキノン	15g
5-メチルベンゾトリアゾール	200ml
1-フェニル-5-メルカプトテトラゾール	30mg
水酸化カリウム 使用液のpHを10.5にする量	
臭化カリウム	4.5g

(組成B)

純水 (イオン交換水)	3ml
ジエチレングリコール	50g
エチレンジアミン四酢酸二カリウム塩	25mg

67

酢酸 (90%水溶液)

5-ニトロインダゾール

1-フェニル-3-ピラゾリドン

現像液の使用時に水500ml中に上記組成A、組成Bに溶かし、1 lに仕上げて用いた。

68

0.3ml

110mg

500mg

【0121】

\* \* 【表2】

No	〔1〕の化合物 化合物No	ヒドラジン誘導体 化合物No	感度	残色	セーフライト 0分放置	カブリ濃度 No5A30分放置	黒ボツ		備考
							保存 I	保存 II	
101	D-1	c-8	100	1.5	0.04	0.29	2	1	比較
102	D-2	c-8	60	3	0.04	0.29	4	2	比較
103	D-3	c-8	55	3	0.04	0.27	4	2	比較
104	1-2	c-8	120	4.5	0.04	0.05	5	5	本発明
105	1-3	c-8	125	5	0.04	0.05	5	5	本発明
106	1-9	c-8	125	5	0.04	0.05	5	5	本発明
107	1-21	c-8	125	5	0.04	0.05	5	5	本発明
108	1-31	c-8	125	4	0.04	0.05	4.5	4.5	本発明
109	1-9	c-1	125	5	0.04	0.05	5	5	本発明
110	1-9	c-4	125	5	0.04	0.05	5	5	本発明
111	1-21	c-4	125	5	0.04	0.05	5	5	本発明
112	1-3	c-3	125	5	0.04	0.05	4	4	本発明

【0122】表2の結果からも実施例1と同様に本発明の試料は良好な結果が得られた。

【0123】

【発明の効果】本発明により、赤色波長域に高感度を有し、現像処理後の残色が少なく、高温下で保存しても黒

50 ボツの発生が少なくかつセーフライト性も良好なハロゲ

ン化銀写真感光材料を提供することができた。